

## 日本語と中国語の敬語に関する一考察

唐麗燕\*・易洪艷\*\*

### A Study on Honorific Between Japanese and Chinese

Liyan Tang\*, Hongyan YI\*\*

A comparative study on honorific between Japanese and Chinese especially on its concepts, classification, origin and change etc. was accomplished. The important achievements are summarized as follows: 1. The honorific concept and its purpose are basically in common between Japanese and Chinese. 2. The origin of Chinese honorific is completely different from the one of Japanese honorific. 3. The classification of Japanese honorific is similar to Chinese one in some aspects but much more systematic. 4. Both the Japanese honorific and Chinese honorific change as the times change. The former is represented mainly in language form, skills and application, and however the later focused on its application conditions.

Keywords: Japanese, Chinese, Honorific, Classification, Origin, Change

#### 1 はじめに

日本語には「体系性、規則性を持った敬意を表す言語手段」という意味での敬語があるのに対して、現代中国語にも「ある対象に対して気配りを示す言語手段」という意味での敬語表現がある。どの国の言葉の中にも敬意や丁寧さを表す言葉が存在していると言える。日中両国の敬語表現についての既往研究では、日本語の敬語表現と対照比較して台湾の中国語社会における敬語表現の運用実態を考察した研究<sup>1)</sup>、中国語における敬語表現<sup>2)、3)</sup>などが見られる。また、筆者の前報の「日本語と中国語における敬語表現の比較」<sup>4)</sup>においては、敬意を示すのにどのような言語手段を用いるのかという観点から、現代日中敬語表現を比較した。しかし、日中敬語の発生、変化などについての研究は既往研究でも前報でも行なわれていない。本稿では現代日中敬語の概念、敬語の分類、敬語の起源、敬語の変化を明らかにすることを目的とする。

#### 2 敬語の概念

##### 2-1 日本語の場合

相手や話しの中の人物に対する敬意を表す言葉的な表現を敬語という<sup>注1)</sup>。敬語は一口に敬語と言って

---

\* 教養部 中国中南大学

\*\* 中国西安外国語大学

も、広義に解するのと狭義に解するのとでは、その間に差がある。前者に従う場合は、話し手・聞き手・話題の人物の間の上下親疎などの関係に基づいて変わる言語の形式の全てをいうことになる。これは人に対する待遇の仕方が言語表現に現れたものだから、待遇表現などとも呼ばれる。しかし、一般にはもう少し狭い意味にとって、目上の人、また関係の浅い人に対する特定の物言いを敬語と言っている<sup>注2)</sup>。

国語辞典の類を試みに紐解いて見ても、「尊敬の気持ち」とか、「相手を敬う気持ち」とか言った大同小異の説明が見られる。

敬語の概念規定の仕方は過去から現在に至るまで諸説があつて定まらないが、それに共通して言えることは「敬意を表す言葉」とする点であろう。

## 2-2 中国の場合

日本語の「君」、「僕」や「先生」と言った呼称は中国から入ってきたものであるから、元々中国語自体に敬語が発達していることを示す。現代でも「恭敬語」、または「客套話」などと呼ばれているものが、ほぼ日本語の敬語に当たる。

しかし、現代中国語においては、敬語があまり使われないと言われる。敬語に関する考察も数が多い。これは恐らく中国語に体系的な敬語法が存在しないためであり、また、かつて中国で用いられた敬語が社会制度によりほとんどその生命を失ったためでもあろう。

それにしても、過去であれ現在であれ、敬語というものは社会の構造と密接に関わる存在であるため、中国の人たちが日常全く敬語と縁がないということはあるまい。現代中国では新しい社会に相応しい新しい人間関係において、それに見合った敬意の表現を使う。

中国語の辞書には「敬語」という言葉がないが、「敬」の意味については、『中国語大辞典』<sup>注3)</sup>には以下のように示す。

①敬う。恭しく接する。敬意。例えば、

「敬之以礼」礼儀正しく敬う

「致敬」敬意を表す

「肅然起敬」きりっと襟を正す 尊敬の念に打たれる という使い方がある。

②旧時の敬意を表す贈物。例えば、

「喜敬」結婚のお祝い という使い方がある。

③飲み物、食べ物、または品物を恭しく差し上げる。例えば、

「敬你一杯」あなたに一杯差し上げましょう という使い方がある。

また「敬語」の代わりに「敬辞」という言い方がある。『辞海』<sup>注4)</sup>によると、

「敬辞」也叫敬语、与谦辞相对。表示尊敬和礼貌的用语。如贵方、阁下等。」という中国語の記述があつた。これを日本語に訳すると、「敬辞」は敬語とも言い、謙讓語の反対である。尊敬と礼儀を表す言葉である。例えば、貴方、閣下などである。

以上の辞書の説明を見ると、中国語の敬語というのは相手に尊敬を表す言葉だと言えるだろう。

### 3 敬語の分類

#### 3-1 日本語の場合

敬語の分類については諸説があつて定まらないが、今日最も一般的には、相手や第三者を敬つていう尊敬語、話し手自身、または話し手側のものについてへりくだつていう謙遜語、および物言いを丁寧な物言いにする丁寧語の三つに分類する方法が行われる。これは吉岡郷甫の『日本の口語法』(明治39年(1906刊))あたりを淵源とするものであるが、それ以前は近世以来の敬謙二分の考えが一般であり、山田孝雄の『敬語法の研究』でも敬称・謙称の二分が行われている。その二分に平行して三分が現れたのは、松下大三郎や三矢重松などによって、今日いうところの丁寧語が「対者待遇」、「一般尊敬」などの名のもとに他の敬語と異なる点について注目されて以降のことである。しかし、このようにして現れ、かつ一般化した三分説に対し、時枝誠記は自説である言語過程説の詞辞論に基づいて敬語をも詞の敬語と辞の敬語に分けた。石坂正蔵は時枝の敬語観を批判し、新たに敬語的人称の概念を唱えて、山田説を発展させ三分説(敬語的自称・敬語的他称・敬語的汎称)を提唱したが、山崎久之の説や岡村和江の第一分類、また辻村敏樹の素材敬語・対者敬語の別などは時枝説によっている。これに対し、宮地裕は時枝説や辻村説を止揚し、詞辞連続論の立場から従来の三分法を発展させた尊敬、謙譲、美化、丁寧、丁寧

表1 敬語の分類

従来の3分類	新しい5分類	
尊敬語	尊敬語	相手側または第三者の行為・ものごと・状態などについて、その人物を立てて述べるもの。 (例) なさる、読まれる、ご出席、お名前
謙譲語	謙譲語Ⅰ	自分側から相手側または第三者に向かう行為・ものごとなどについて、その向かう先の人物を立てて述べるもの。 (例) 伺う、お届けする、申し上げる
	謙譲語Ⅱ (丁寧語)	自分側の行為・ものごとなどを、話や文章の相手に対して丁寧に述べるもの。 (例) 申し、参る、いたす、小社
丁寧語	丁寧語	話や文章の相手に対して丁寧に述べるもの。 (例) です、ます、ございます
	美化語	物事を美化して述べるもの。 (例) お酒、お料理

寧の五分類を立て、大石初太郎は宮地の丁寧、丁寧に当たるものを丁寧の名で一括している。その他の敬意の対象を分類基準として松下説と通じる玉上琢弥・渡辺実の受手尊敬・為手尊敬・話し手卑下・聞き手

尊敬の別、馬淵和夫の動作主尊敬・対象尊敬・丁寧・謙譲などもあり、諸説交錯して定まらない。

このように敬語の分類問題に対して、2007年2月文化審議会は敬語の種類や役割を見直した「敬語の指針」をまとめ、これまで敬語の種類を「尊敬語」「謙譲語」「丁寧語」と三分類にしていたものを見直し、謙譲語を「謙譲語Ⅰ」と「謙譲語Ⅱ」に、丁寧語を「丁寧語」と「美化語」に細分化し、従来の尊敬語と合わせて計5つに分類している（表1）。

### 3-2 中国語の場合

先ほど言ったが、敬語は現代の中国ではあまり使われていないが、しかし相手に対して気配りを出す手段はある。ここ数年、中国で提唱されている「礼貌語言」（礼儀正しい言葉遣い）がここに含まれる。中国語で敬意を示すものは、三つのタイプ（1）敬意表現、（2）丁寧表現、（3）謙譲表現に分けられる。

以上のように中国語の敬意を示すタイプには日本の敬語と類似する所が見られる。

## 4 敬語の起源

### 4-1 日本語の場合

日本語の敬語の起源の問題については今日諸説があって定まらない。即ち、神や天皇あるいは人に対する礼儀からとするもの、それに対して礼儀のみを以って説いては逆に卑しめの表現のあることを説明できないとし、更に進んで上下尊卑の識別意識の言語的反映として見るもの、あるいは人や物についての日本人の細かな心情の表れとする説があり、更には古代人の言語タブーから発したとする説など様々である。

金田一京助氏は敬語の起源を古代人のタブーの意識に求められた。金田一京助氏は蒙古人の言語のタブーに関するラムステッドの説や、婦人語の起源についてのイエスペルセンの説を踏まえ、アイヌの女性が夫の名を口にすることをタブーとする事実を目をつけ、妻が夫に使う言葉が、そのまま年少者に受け継がれて敬語となるとされた。これは敬語の婉曲性から見ると十分考えられる所である。

辻村敏樹氏はそれらの諸説のうち金田一京助博士のタブー説に最も近い考えを持つが、敬語の起源を一元的に見ることは危険であると指摘している。

敬語は古代人の神（人智人力を超えた自然界の存在）に対する畏敬の気持に基づいた言葉のタブーや言霊思想から生まれたものと考えている。即ち、原始時代の人々は神についてこれを露わに口にすることを恐れ、遠まわしに婉曲に表現すると共に、それを称えることによって幸のもたらされることを信じ、美しい言葉を並べ立てた。そして、それが後に敬語となったものと思われる。

敬語は最初、専ら神や天皇への畏敬の気持を表すのに用いたと思われる。ところで、このような意識から生まれた敬語は、後に人間関係における上下尊卑の認識と表現へ発展する。

### 4-2 中国語の場合

中国語の敬語は人の気魄（人間の生の領域）を犯さないことから生じたものだと考えられる。

中国では人間が死んでも、魂魄が残っている。漢語ではたましいのことを「魂魄」（こんぱく）というのだが、それは日本的な「たましい」や「亡霊」とは違う。魂のほうは「氣的」で、魄のほうは「質

的」である。魂はつかみにくい、魄はそこに触ることも見分けることもできるのである。中国の魂魄は、いわば生前の生命の延長なのである。人間が死んだ後、当分の間は（火葬にしないかぎり）、体は墓の中で厳重な棺桶に守られて、その形を保っている。その限りにおいて、魂魄も残っている。けれども、数年、数十年、数百年立てば、どんな死体でも分解して解けてしまうだろう。死体がまとまった形を失えば、その魂魄も消えてしまうのだ。だから厚く葬られた死体ほど魂魄も長く残る。あらゆる手段を講じて厚く葬られるのは王侯貴族か大金持ちである。だから彼らの魂魄も庶民に比べると何倍もの長さを経て残っている。魂魄は生前の「身分」と「死後の寿命」にまで影響する。

魂魄が中国人の人間の生命というものについての意識の底流をよく表している。また魂と魄について、『春秋左氏伝』（昭公7年）の条に、「人が生まれて始めて化するを魂という。すでに魂を生じて後、その陽（軽く上がる）なものを魄という。物を用いて精多き時は、その魂魄もまた強し。」と明快な説明が載っている。

とりわけ魂とは、肉体の生氣そのものを即物的にとらえた概念だから、体力が充実し、権力を身につけて、人々を威圧するような体力・気力を備えている時には、「気魄」がこもっているわけだ。王侯貴族や大金持ちは「物を用いて精多き」存在だから、気魄もまた強い。しかし、凡人と言えども、生きている以上はやはり多少の気魄を備えているわけである。「匹夫匹婦と言えども、その志を奪うべからず」というわけで、「志気」のない者はまずいないだろう。その奪ってはならない、また奪うことの許されない「生の証、即ち生の領域」が気魄なのである。気魄そのものは、人が生きている限り存在する。

人の気魄（生の領域）を奪ったり犯したりすることは、必ず摩擦と抵抗とを引き起こす。人々の気魄は、そっとしてあるがそのままに置いておかねばならない。「仁」（等しい二人）とは、二人が人として共存すること（二人とは共存する最小の単位であるから）、余計な摩擦を起こさぬためには、他人の存在、つまりその生の領域を起こさないようにすることが第一歩であろう。

敬語というものは、そこから生じたものである。

敬語の起源から見ると、中国の場合は日本と異なったことが分かった。

## 5 敬語の変化

### 5-1 日本語の場合

日本の敬語は、いつの時代にも固有の変化があったが、概略的な分類では尊敬語、謙譲語、（中世以後）丁寧語があるというのは今日まで保たれてきた。しかし、この大枠は今後とも保たれていくのかどうかは言語学者でも予測しにくいと思う。しかし、今までの変化は大きいと言える。

辻村敏樹・川岸敬子氏（共著論文）は、敬語の歴史の概観にあたって四つの柱を立てた。そのうち〈敬語の起源〉は別として、残る三点、(1)絶対敬語から相対敬語へ、(2)対話の敬語の発達、(3)敬度の漸減／補強は、これまでの敬語の変化をマクロに見た場合の特徴を的確に捉えた三点だといってよい。辻村・川岸氏の(1)(2)(3)が、古くから現在までの敬語の流れだが、敬語の歴史の中での現代敬語の特徴として、菊地康人は『敬語』の中で、(4)敬語の大衆化を付け加えた。そして、菊地氏は現在進行中の敬語の変化

を三点にまとめた。

- (1) 語形の変化（誕生）、以前は使われてこなかった「お（ご）—される」が、尊敬語として使われるようになってきていること。
- (2) 機能の変化、謙譲語「お（ご）—する」が尊敬語として使われる傾向があること。また、本来は謙譲語である「あげる」の美化語が進んでいること。
- (3) 適用の変化、「聞き手から見て高める対象とは思われない三人称を高めるのは、聞き手に失礼である」という適用ルールを持たない人が、若い世代に増えていること。

## 5-2 中国語の場合

もともと中国語自体に敬語が発達していて、「御製」、「御筆」のように皇帝や皇室に対して多く敬語を使っていた。しかし、中国の敬語はそれぞれの時代の社会体制から大きな影響を受け、古代から現代へ、君主専制の清帝国から中華民国、さらに中華人民共和国への移り変わりの中で、文語文は白話文（口語文）に切り替えられ、次第に現代語における敬語が形成された。新中国の成立によって生み出された新しい人間関係によって、敬語にも次第に変化してきたのが当然であろう。旧中国、上層階級や知識人にのみに通用していた敬語は、一部分、もはや過去のものになってしまったが、一方では、新しい敬語が生まれたのである。

新中国成立後 1949 年以後から、「老爷」（旦那様）を始め、「太太」（奥様）、「少爷」（若旦那様）、「小姐」（お嬢様）など、「封建官僚買弁階級の特権思想を映した」敬語は既に消滅してしまっている。これらが用いられるとすれば、否定的な意味を担うか、複合語の中に置いてか、外国人に対してのみである。しかし、「小姐」という呼称は 1949 年以後は外交的な場面でのみ用いたが、80 年代になると中国大陆に來台、香港及び在外華僑の未婚女性に対して「小姐」と呼ぶようになる。また、外国人を接待する、外国と関係あるホテル及び大会社の若いサービス業の女性に対しても、「小姐」と呼びかけるようになった。21 世紀に入ると、「小姐」と言う呼称の使用範囲はもっと広がってきて、風俗業の女性を指して使うようになったため、近年この「小姐」の呼称は女性に嫌われた。

また、「太太」（奥様）は既婚夫人に対する敬称で、普通は他人の妻を言うが、近年自分の妻を言う時にも使われる傾向が見られる。例えば、「我太太让我向你问好。」（家内があなたによろしくと言っていました。）「先生」（先生）も近年ホテルマンやレストランのウェイターに話し掛ける時によく使われ、成人の男性に対する一般的な尊称になっている傾向が見られる。更に「久仰大名」（御高名はかねてから承っておりました）のような挨拶も限られた人々の間ではあるが、再び用いられるようになった。

以上の敬語の変化から見ると、日本語の場合には語形の変化、機能の変化、適用の変化などに現れ、中国語の場合には使用の変化、意味の変化などに表れている。両者も時代と共に変化していたことが分かった。

## 6 まとめ

以上、日本語と中国語における敬語の概念、敬語の分類、敬語の起源、敬語の変化について考察して

きた。その結果は以下のようなものである。

(1) 敬語の概念については、日本語では規定の仕方は過去から現在に至るまで諸説があつて定まらないが、それに共通して言えることは「敬意を表す言葉」とする点であろう。中国語では「敬語」の代わりに「敬辞」という言い方があり、相手に尊敬と礼儀を表す意味である。敬意を表す意味は日本語と中国語の敬語の概念において共通している所だと言える。

(2) 敬語の起源については、日本語では敬語は最初、専ら神や天皇への畏敬の気持を表す意識から生まれ、後に人間関係における上下尊卑の認識と表現へ発展するものだと考えられる。中国語では敬語は人の気魄（人間の生の領域）を犯さないことから生じたものだと考えられる。日本語と中国語における敬語の起源は全く異なっている。

(3) 敬語の分類については、日本語では諸説があつて定まらないが、今日最も一般的には尊敬語、謙遜語、丁寧語の三つに分類する方法が行われる。中国語では敬語はあまり使われていないが、しかし相手に対しての気配りを示す手段はある。中国語で敬意を示すものは、三つのタイプ敬意表現、丁寧表現、謙讓表現に分けられる。中国語では日本語のように系統的に分類することはないが、日本の敬語分類と類似する所が見られる。

(4) 敬語の変化については、日本語では語形の変化、機能の変化、適用の変化などに現れ、中国語では使用範囲の変化、意味の変化などに表れている。日本語と中国語の敬語は両者とも時代と共に変化している。

注

- 注 1) 日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部編集：『日本国語大辞典』第二版第4巻、p. 1224、小学館、2001年
- 注 2) 辻村敏樹：『敬語論考』 p. 226、明治書院、1992年
- 注 3) 大東文化大学中国語大辞典編纂室：『中国語大辞典』（上）pp. 1622-1623、角川書店、平成6年
- 注 4) 辞海編輯委員会：『辞海』、p. 1782、上海辞書出版社、1999年

参考文献

- 1) 陳瑞紅：「日本語と中国語の敬語表現-吉本ばななの作品とその翻訳を題材に-」、『人間文化研究科年報』（21）、奈良女子大学大学院人間文化研究科、pp. 39-54、2006年
- 2) 山崎淑子：「中国語における敬語の表現」、『福井工業大学研究紀要』第一部（27）、福井工業大学、pp. 155-166、1997年
- 3) 張国生：「中国語における敬称と人称詞による敬語表現の一考察」、『東海大学紀要・外国語教育センタ』（24）、東海大学、pp. 1-14、2004年
- 4) 易洪艷・金春子：「日本語と中国語における敬語表現の比較」、『福井工業大学研究紀要』第二部（40）、福井工業大学、pp. 545-554、2010年
- 5) 藤堂明保：「中国語の敬語」（林四郎・南不二男『敬語の講座⑧ 世界の敬語』）、明治書院、pp. 139-162、昭和49年
- 6) 辻村敏樹・川岸敬子：「敬語の歴史」『講座 日本語と日本語教育 10 日本語の歴史』、明治書院、pp. 202-224、1991年
- 7) 木村哲也・劉笑明：『北海道教育大学紀要』第一部 A 人文科学篇 43(2)、北海道教育大学、pp. 9-20、1993年
- 8) 福間康子：「敬語新分類の「指針」と問題点」、『教養研究』14(2/3)、九州国際大学、pp. 37-53、2008年
- 9) 国語学会編：『国語学大辞典』東京堂出版、昭和57年
- 10) 辻村敏樹：『現代の敬語』、共文社、1967年
- 11) 金田一春彦：『日本語の特質』、日本放送出版協会、平成3年
- 12) 辻村敏樹：『敬語論考』、明治書院、1992年
- 13) 刘月华・潘文娛等：『現代中国文法総覧』（上）（相原茂監訳）、くろしお出版、1994年
- 14) 相原茂：『中国語学習ハンドブック改訂版』、大修館書店、1996年
- 15) 菊地康人：『敬語』、講談社、2000年
- 16) 康玉華・許秋寒・鐘清：『中国語基本辞典』、東方書店、2000年

（平成23年3月31日受理）